
HAPPY TURN ?

白湯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

HAPPY TURN?

【Nコード】

N9888P

【作者名】

白湯

【あらすじ】

9 / 16 タイトル変更しました 24歳、小林瑠依こばやし・るいは、会社をリストラされた帰宅途中、正体不明の男に鈍器で殴られ、気がついたら異世界へ！！「元の世界に戻りたいなら協力しろ」って迫られて?! 平凡な元OLから「異界の魔女」にクラスチェンジした瑠依の、異世界騒動記。わりとマイペースな主人公です。王道、逆ハ丨風味になる予定？

プロローグ

きのせいだ、

そう おもいたかった

いつのまにか とまってた めざましどけい

ひとりでに ころがった えんぴつ

しめきった へやで ゆれた かーてん

ぜんぶ、きのせいだと、

おもいたかった

連載開始です 五話分までサイトで書き溜めてた分を一気に投稿
します。

その後は、週一くらいで更新できたらいいなあと思っています。

訂正追記：連載はこちらに絞って続けることにしました。少し手直
しして、続きに入りたいと思います。

一話

「……あざあつしたあー」

やる気なさげな店員の声。

パンパンのビニール袋を手に、ウィーンと開いたコンビニの自動ドアから、外に出る。

ビニール袋の中身は、ビールとチューハイ合計10本、プラス、つまみの唐揚げとスルメ。

大人買いした重い袋と体をひきずって、私はふんぬーっと足に力を入れ、歩き出す。

……ヤケ酒しなきゃ、やってらんねーわ。

私、こはやし・るい小林瑠依、24歳。

今日から無職決定です。

大学を卒業し、何とか仕事にありつき早一年半。

五十以上の面接を受けて、ようやく受かった小さな会社の事務員として働いていた私。

平凡なりにがんばった、つもりだったわ。

仕事を早く覚えようと、毎日必死だった。

資格もとったし、サー残も笑顔で引き受けた。

仕事はしなくせに、人のミスを目ざとく見つけるお局様の嫌味にも、耐えた。

会社ではぐつとこらえて、でも家に帰りついた途端泣いたこともあったのよ。

最近はやうやく一人前に扱ってもらえるようになって、仕事も増えて。

忙しかったけど、自分が築き上げた居場所だと思ってた。

でも、世間は私が思ってた以上に、世知辛かったんだよね。

昨今の不況により、この一年で、会社の業績はガタ落ち。

リストラがあるかもとか、株価が下がったとか、どこからともなく聞こえてくる噂に、おびえる毎日。

でも、どこかで、辞めさせられるのは自分じゃないはずって思ってた。

私、媚びるのは下手だったけど、アレコレ言い訳して手を抜こうとするお局様よりきちんと仕事してたんだもの。

彼女は、美人で愛想がよくて、上司受けはよかった。だとしても、仕事ぶりできつと評価されるって。

希望的観測が打ち砕かれたのは、ひと月前。

苦い表情の部長からリストラを言い渡されたのは、私の方だった。

で、今日は最後の出勤だったってわけ。

定時の鐘の後に、私を送り出した部署のみんなはどこかよそよそしかった。

「あなたは若いからすぐ次の仕事が見つかるわよ」

そう言ったお局様の声には、『勝った』っていう優越感の響きがあ

った。

顔にも思いきし、そう書いてあった。

ちつくしよー、今のご時世、どんだけ仕事見つけるのが大変だと思
ってんのよ！

でも、グチグチ考えたって、しょーがない。

今日は浴びるほど飲んで、フテ寝してやるわ。

そうそう、たしか料理用買ったワインもあった。足りなかつたら
あれを飲めばいい。

つまみにチーズも買えば良かった……なーんて歩きながら考えてた。

その時、ふと、たった一人の家族のことが頭をよぎった。

『瑠依。何かあったら、絶対オレを頼れよ』

いつまでたっても、妹を甘やかすシスコン兄の声が、耳元で聞こえ
た気がした。

月イチの電話で聞く兄の声は、いつだって優しい。

(お兄ちゃん……)

不安な気持ちを兄に聞いてもらいたい、そんな甘えたな気持ちがふ
くらむ。

……いやいや、だめだ。

せっかく独り立ちしたのに、それじゃ意味がないじゃないっ。

リストラの話を知ったら、『一緒に住もう』とか、世話を焼くに違
いないんだから。何せ、友達が引くくらいシスコンだもん！

まあ貯金もしてるし、当面はなんとかなるでしょ！
その間にバイトでもなんでも、仕事を探して。

私はだんだん俯きがちになっていた顔を上げた。
ほら、ふっるい歌にもあるじゃない、上を向いてたら気分も上向き
になるってもんよ。

思いつきり、ぐわっと首を上げる。

見上げた真つ暗な空から、三日月が私のことを見下ろしていた。

「あー……キレイ」

コンビニ袋の重さでヨタヨタ歩いてた私は、足を止めた。

そして、ぼけーっと月をながめてた。

今夜は月見酒かな。なかなか風流じゃない。

とか思ってた時である。

「……………% ?#\$」

「ふおっ！！？」

ガコッ！

驚いた拍子に変な声が出て、思わず離してしまった袋がアスファルトと衝突した。

缶が鈍い悲鳴をあげる。

今、男の人の声が聞こえたような……

な、なにかしら。
もしかして、変質者とか……強盗!?

急に怖くなって、きよろきよろと辺りを見回す。
でも、青白い街灯が照らす路上には、どこにも、誰もいなかった。

(気のせい……?)

変だな、と思ったけどそれ以上気に留めなかった。
それより、

「あああもうっ、ビールが泡だらけになっちゃうじゃない!」

私は足元に転がった袋を見て、あわててかがむ。

泡だらけのビールって、すっごく損した気分になるよね! 許せないよね!

くそう……と袋を拾い上げて、悪態をつく。

立ち上がってビール袋を覗きこむ。うわ、漬物がぐちゃぐちゃだ。舌打ちをしかけた時、背後から強い視線を感じた気がした。突き刺さるような、鋭い視線を。

反射的に、ふり返った。

私の数メートル後ろの、電信柱が目に入る。

さっきまで誰もいなかったはずのその背後に、男が佇んでいた。

男は、影から一步踏み出した。

背が高い。あと、嫌味がよって言いたくなるくらい足が長い。

どんな光も飲みこみそうな漆黒の髪が、彼の歩調に合わせて揺れた。

髪が黒かったから最初は気付かなかったけど、彼が青白い蛍光灯の光の中に足を踏み入れた時、私は息を飲んだ。照らされた目鼻立ちは、明らかに日本人じゃない。

西洋の絵画から抜け出たような彫りの深い顔は、限りなく完璧に近い美しさだった。思わず、目を皿のようにして凝視してしまう。

日本の住宅街が激しく似合わない。バラでも背負ってそんな感じ。そんなことが脳裏をよぎったけど、実際は口を半開きにして呆けた。

だから、相手の様子がおかしいことに気づくのが遅れた。

男は、氷のような笑みを浮かべ、ゆっくりと私に近づいてくる。

中性的なしなやかな手に握られているのは……棒？ 違うな、バット？

……

この人、とてもじゃないけど野球なんかやるように見えないんですが。

そうしたら、この人がバットを持ってる理由って……

脳内に、最大級の警報が鳴ってかけめぐる。ぞくり、と全身から血の気が引いた。

「ひゃうあぁっ！……！」

ガッシャ！

もう一度、路面に袋が投げ出される。

に、逃げなきゃ！！

自意識過剰な勘違いかもしれない。

道に迷っただけの外人さんかもしれないけど……他の人に聞いてね

とばかりに、金縛りが解けた私は一目散に駆け出した。

けれども、日ごろの運動不足のせいか、

ずべしッ

三步走って、派手にコケた。

「あ、いった〜〜……」

膝をしたたか打ちつける。

こんなことなら、会社のエレベーターなんか使わずに、毎日階段使つてりゃよかつたわ！

「&¥ £ >……」

うづくまる私の近くで、男の声があった。

言葉は外国語みたいだった。何言ってるのか、全然理解できない。

痛みに耐え、首をよじって肩越しに後ろを見た。

私の顔に、彼の影がかぶさる。

優美な仕草で、男がバットをふりかざしていた。

「やだ ……！！」

凶器と化したバットは、止まらない。

男の腕が、ためらいを微塵も見せず、鈍器をふるつ。

私の頭めがけて、真っ直ぐに。

機械のように正確に。

仮面のような、冷たい微笑を浮かべて。

ガツッ

衝撃。

目の前で火花が散って、世界が揺れたと思ったたつぎの瞬間、目の前が暗転する。

あ。

これは、死んだわ。

頭蓋骨陥没くらいしたかも。もともと残念な頭の中身だったけど、この一撃で致命的なダメージを受けた気がするわ。

遠のく意識の中、私はこの世でたった一人の家族に謝った。

お兄ちゃん。

妹の先立つ不孝をどうか、お許しください。

瑠依は、一足早く、父さん母さんの元に旅立ちます。

一話

果てのない闇に飲みこまれる。

深くて黒々とした奈落に落ちてくような、

底なしの泥の中を沈んでくような。

これが、「死」……？

そうだとしたら神様、お願い。

タンスの中の、パンツの間に隠してた、いざって時のへそくり四万
円。

お兄ちゃんに、ちゃんと見つけさせてあげてください……

……完全に意識が断たれる寸前、

闇の中に、星のような小さな光が瞬いた気がしたのは、錯覚かしら
………？

「……………@*?」

……………ん。

「……………||#%」

変ね。声が聞こえるわ。

私、まだ生きてる……………？

誰かが病院に運んでくれたのかしら……………

だとしたら、あの男はどうしたんだろう……………？

暗闇に沈んでた意識が、ゆっくり浮上する。

私は、薄く目を開けた。

……………最初に目に映ったものは、馴染みの薄いものだった。

ふつつ、仰向けに病室なんかで寝てたら、白っぽい無機質な天井が目に入るもんじゃない？ でも、これは明らかに違う。

だから、それが何だか分かるのに少し時間がかかった。

薄明かりに見えるそれは、石を組んで作られた天井みたいだ。

天井を支えてる壁も、似たような灰色の石を積んだもの。

つまり私は、石造りの、四角い小部屋にいるらしい。

で、私はここに仰向けに寝ている。背中に固い石床の感触があった。

……………明らかに病院じゃないわコレ。

カビくさいし、倉庫みたいな雰囲気だ。

人が生活するための部屋って感じじゃない。

つまり、誰かが怪我した私を見つけてくれて、救急車を呼んでくれた……なんていうラッキーな可能性は、限りなくゼロってことじゃあ……

私は軽く身じろぎして、再び目を閉じた。

現在の状況を整理しようとして、実際には取り留めのないことを考え始める。

逃避か、はたまた殴られたショックで混乱してるのか、私も定かじやない。

とりあえず、一口も飲めなかったビールのことは頭から消えていた。

……私、やつぱり死んじゃったのかしら。

だって、本気で頭殴られたんだもん。

とすると、天国……？ イヤちょっと待って。

天国つてもっと、パアアアアアアツと華やかで明るくて、ちっこい天使がフワフワ飛びながら、ラッパとか笛とか鳴らしてるような場所じゃないかしら。

こんな薄暗くてジメジメした、イヤーな感じじゃないと思うのよね。

だとしたら、ここは地獄の入口かもしれない。

なるべく善良に生きてきたつもりだったけど……身に覚えがないわけじゃない。

私はやつぱり、

ザバツ！！

「うぁー！！!?」

仰向けになったまま、ぼんやり考えていた私の頭上から、突然冷たい水が降ってきた。

急に口の隙間から水が入ってきたおかげで、気管が詰まる。

ゴホゴホ、と背中を丸めて咳きこんでると、固い爪先が私の肩をこづいた。

「%&*£」

水が降ってきたのと同じ方から声がして、涙目で上を見上げると、私を殴ったあの黒髪の男がすぐそばに立っていた。

美しい顔に、例によって感じの悪い冷笑を浮かべ、私を見下ろしてゐる。

薄明かりの中で見る彼は、西洋の古い映画なんかにあるような、仰々しい服をまとっていた。

ゆったりしたコートだと思ったものは、ビロウドのマントだ。

その下に着てる上着の襟もとはファーがあしらわれてて、正面に銀色のボタンがならんでる。

上着の上から、腰に二重のベルトを巻いてて、剣のようなものが下がっていた。

そして、ぴったりしたズボンと、ロングブーツをはいている。

そのすべてが、彼の髪や瞳と同じ、黒で統一されていた。

えーと、これは……

もしかして、外人のコスプレマニア……？

いやいや、地獄の番人か？

どちらにしても、ひどい仕打ちには違いない。

瞬間沸騰した私は、半身を起こして、その男に抗議した。

「ちよつとアンタ！ 問答無用で殴ることないでしょ！

SMプレイが好きなのコスプレマニアなら、同類同志でやんなさいよ！

それとも何？ あんた、地獄の番人とかファンタジーな職業だった
りするわけ？

だとしても、処女つて無条件で天国に行けるもんじゃないの？

浮世の煩惱にまみれなかった分、情状酌量を求めます！」

勉強にバイトに就職活動に仕事に打ちこんだおかげで、私の人生に
は恋愛という彩りが一切欠けている。

でもね！ べ、別に、彼氏いない歴〓年齢が恥ずかしいとか、思っ
てないんだからね！

むしろ、交渉材料の一つになるなら、結果オーライ！

男はマシンガンのように矢継ぎ早に並べられた私の言葉に、軽く目
を瞞った。

そしてひとつ頷いた。

さつきこの人、わけわかんない言葉を話してたけど、私の必死な気
持ちがもしかしたら通じたのかもしれない。

そーよ、話せばきつとわかってくれるわよね？！

たとえ、清らかな乙女を撲殺しかけたヒトデナシでも！

平和的な意思疎通をはかるために息を吸いこんだとき、彼はなにごととか小さく呟き、私に手をかざした。

かすかに耳に届いた言葉は、やっぱり日本語じゃない。英語でもない。

ベラルーシ語とかかしら。外見はヨーロッパぽいもんね、この人。ところでベラルーシってどこだっけ。

「……な、なに……？」

一瞬、苦しさとか状況とか、何もかも忘れて私は目を丸くした。だって、男の手がぼうつと光りだしたから。

丸い光は男の手を離れて、床に座りこむ私の額にすうつと落ちてくる。避けてる余裕はなかった。

「あ、あつっ……」

光は私の額に吸いこまれて消えた。でも、光が触れた場所が熱い。

熱は頭の中に入ってきた。

そんな馬鹿な、と驚愕する暇もなく、脳の内側をかき回されるような不快な感覚に支配される。そのおかしな苦痛に、頭を抱えて呻く。

何、これ、苦しい……！！

髪を掻きむしって、荒い息を繰り返す。
目じりに涙がにじんだ。

その気持ち悪い感覚は、ほんの一瞬だったかもしれない。
でも、あまりにも苦しかったせいも、長い時間みたいに感じた。
頭の中をかき回す不快な何かが、波が引くように薄れたとき、

「……僕という言葉がわかるかい？」

甘く低い声が、流暢な日本語を紡いだ。

三話

「……う」

頭の中に不快さの余韻が残ってて、反応できない。喉の奥から乾いたうめき声をあげながら、石の床で身を擦ってた。

「僕の言葉がわかるかって、聞いてるんだけど？」

それなのに、声が間近で聞こえたかと思うと、いきなり胸倉をつかまれた。

力任せにグイッと持ち上げられて、今度は喉がく、くるし……

「ねえ、どうなの？」

男の美しい顔が、至近距離にある。

それで気づいた。相手の冷笑が、初めて会った時から全く変わっていないってことに。

気狂いとか嗜虐趣味とか、そんなレベルじゃない底知れなさ。

彼に対する、本能的な恐怖で、肌が粟立つ。

さすが、初対面の清らかな乙女を、躊躇なく撲殺しようとした人だ。

首の可動域が小さいながらも、必死にコクコクと頷いて、彼の質問に答える。

「全く、手間ばっかかけさせるなあ」

彼は唐突に、私の襟元から、パツと手を離した。

ドサッ

「……や、いった〜っ」

当然、私のおしりと石の床が激突した。

あまりの痛みに、恐怖よりも乱暴に扱われた怒りが勝った。
気がついたら、私は男に食ってかかっていた。単純ってゆーか、私、
命知らずかもしれない。

「ちょっと、何するのよ！ 痛いじゃないの！」

「……誰に向かって口きいてるのさ？」

男の目が冷たく光った。

途端、見えない手で喉を締め上げられたみたいに、苦しくなる。

声が出ない。息ができない。

彼は、指一本動かしてないっていうのに……

「僕を怒らせるな。逆らうな。君の力が僕には必要だから、殺しは
しないけどさあ。」

でも、言うことを聞かせる方法なんて、いくらでもあるんだよ？
目を潰すとか、手足をもぐとかね」

ハリウッド俳優も目じゃないくらい的美形は、十人中十人の女性が
見とれるような笑顔で、物騒なことを囁く。

完璧に整った唇が紡ぐ、その甘い声には毒が含まれていた。

それも、サンゴへび並の猛毒が！

「わかった？」

「……………はっ、わ、かりましたあ！」

急に、胸の辺りの苦しさが解けた。

こんちくしょう、と思いながら頷く。一体どんなしかけなのよ！！

ゼエゼエと肩で息をする私を、彼は満足そうに見下ろした。

「そういえば、自己紹介がまだだったね。

僕はクーロンザギエル・エルデイス・コークスライン・グラス
ムンド」

長い。ぶっちゃけ覚えられない。

でもね、とりあえず、「はあ」とかなんとか、曖昧に相槌を打つておく。

とにかく、この状況を切り抜けるためには、十代も真っ青のキレやすいクーロンなんとかさんに逆らっちゃダメだ。

「で、ここは地獄なんですよね」

「違う」

「あなたは地獄の番人じゃないんですか」

「全然違う」

あれ、じゃあなんなの。誘拐とか？
私、もしかして死んだわけじゃないのかしら。
だとすると……さつきのは手品？

とりあえず真実を確かめるべく、慎重に問いを重ねた。

「では私は、あなたに誘拐されたんでしょうか」

「人聞きの悪いこと言わないでくれるかな」

「……つまり、誘拐なんですな」

ああでも、生きてれば何とかなるかも！

目の前に、ほんの僅かな光が差しこんだ気がした。
とりあえず説得を試みてみようか。せつかく言葉が通じるのだ。

気持ちに通じるかどうかは、絶望的な気がする。

でもやってみなくちゃわかんないわよね！

「あの……申し訳ありませんが、私、すつごく貧乏なんです。身代
金を支払ってくれるような親戚もいません」

「目的は金じゃない」

じゃあこの貧相な体か！？

「あの、私、酒や煙草や覚醒剤で内臓はボロボロなんです。臓器売
買の取引先に、あなたが叱られちゃいますよ。あちこち病気もいっ
ぱい持ってますし」

これは嘘だ。小学校から今日まで、無遅刻・無欠席・無欠勤。完全無欠の健康優良児である。

「アラブの富豪に売り飛ばすにしても、こんな平凡な容姿では喜ばれないと思いますけど」

引く手数多であろうこのお兄さんに、慰み者が必要とは思えなかったから、そう主張してみる。すると、長つたらしい名前の彼は煩わしげに首を振った。

「何か勘違いしてるみたいだね」

続いて聞かされた言葉は、予想を遙かに超えて、ツッコミどころ満載だった。

「僕は、グラスムンド王国の第二王子だ。君に、協力してほしいことがあって、ここに喚んだ」

……グラスムンド？ ……王子？

思考停止すること、約一秒。

何を言ってるんだろっこの人は。裏拳でツッコんだら満足するのかしら？

グラスムンド……とか聞いたことないし。

この人、頭のかわいそうな人なんだろうか。

哀れみの混じった視線を向けると、クーロンなんかさんの笑顔に
凄味が増した。

「僕の頭は正常だ」

怖い。視線で瞬殺されそうです。

「あの、グラスミス……何とかを存じ上げなかったもので。ごめんな
さい」

即座に謝ると、彼は、笑顔の裏にちろちろ見えていた怒りの矛先を
収めたらしい。産毛すら凍らせそうな冷たい気配が消えた。

……あー良かった。
キレやすい彼を怒らせたら、今度こそ生死に関わりそうだわ。

ほっとしてると、形の良い唇が低い声を紡いだ。

「……まあ当然だよな。ここは、ヴィスールと呼ばれる世界」

「ヴィスール……？」

「君がいた世界からすると、別次元の異世界だ」

「……………」

どうしよう。

「へ、へえ、そーなんですか」

ひきつった顔で頷くと、「その様子だと、信じてないでしょ？」と
つつこまれる。

ええ、しんじてないです。

でも、ここで頷いたらまたキレるかもしんない。

日本人特有の曖昧な笑顔で、「はは……まあ、そうかも」と力なく
笑いつつ濁す。

「まあいい、すぐに信じるよ。というか、信じざるを得ないだろう、
君みたいな馬鹿そうな女でも」

さらりと暴言を吐くと、彼は石の壁にかけられた鼈甲色のランプを
手に取った。

そのときになって、初めて気がついた。

私が倒れてた床には、複雑な文様が描かれている。

まるで、黒魔術の魔法陣みたいな。

彼の手元の炎が揺れて、小部屋の天井に私たちの影が不気味に踊る。
クローンなんとかさんは、部屋に一つしかない出入口の木の扉に手
をかけ、私を肩越しにふりかえった。

「黙ってついてくるんだ」

クローンさん（でいいわよね、フルネームはもう忘れちゃったわ）
のあとに続いて、窓のない暗くて長い螺旋階段をひたすら上へのぼ
っていく。

さっきの部屋もそうだったけど、この会談も暗くてジメジメしてる。一刻も早く外の、新鮮な空気を吸いたかった。

……それにしても、運動不足の身にはツラすぎるわ……
修行僧もかくや、という無心の境地で、えんえん続く階段をのぼりきる。

膝を上上げる動作を三十分ほどした頃かしら。
螺旋階段の最上段で、小さな扉が静かに私たちを待ってた。

クーロンさんが扉を押すと、それは音もなく外側に開く。
隙間から流れ込んできた、涼しい空気が顔を撫でる。

空気に乗って、森の香りがした。

……本当に私、どこに連れてこられたのかしら。
私のアパートは、都心とまでいかないけど、そのベッドタウンにある。

まわりに、自然らしい自然なんて、ほとんどない。

自分が生きてたっという事実と、クーロンさんの暴虐に気を取られてたけど、さすがに、無事に家に帰れるのか不安になってきたわー
……

クーロンさんのヨタ話はアレだけど、相当遠くに連れ去られたのは間違いなさそう。

不安が胸の奥でざわざわと騒ぎはじめる。
嫌な予感がする。

小さな扉をくぐって、暗い空を見上げ

「……月が、赤い……？」

私は絶句した。

四話

見慣れない色の天体を仰いで、息を飲む。

夜空に浮かんだ月は、何度も目をこすって見たけど、やっぱり赤かった。

ありえない赤さだ。

少し朱色が混じった、あざやかな赤。

そう……例えるなら、まるで血のような。

色だけじゃない。大きさもありえない。

いつもの月が十円玉くらいだとしたら、これはサッカーボール程度の大きさだ。

だって……クレーターや月の表面の模様がはっきりと見える。

しかも、この月はまんまるだ。

さっき会社帰りに見上げた月って、三日月だったはず。

「……あ、わかったっ!!」

私は、ぽんと手を打った。

そうだ、これしかない。

「テレビのドッキリか何かなんですよね!？」

この変な空は、映画のセット。ここはきつと、どでかいスタジオの中なのよ!

この人は有名な俳優で、一般人を連れ去ってビックリさせようって

いう企画なんだわ。

……この人、芸能人の自分を私が知らなかったからツンケンしてるのよ、きつと！

不規則な生活でカルシウム足りてないのね。牛乳に相談だ！

ナイス状況判断、とばかりに、きよときよと周囲を見回す。

後ろの螺旋階段の出口は、小さな小屋みたいになってる。

あれは、裏方スタッフの出入口ね。それにしても、森ひとつ入るスタジオつてもすごいわね！。

「で、カメラはどこで……ぐえっ」

「どこまで馬鹿なのかな、君は」

く、苦しい苦しい！ ちょっとタンマ！！！！

男が軽く手をかざすと、見えない何かが再び私の首を絞める。

持ち上げられた亀みたいに手足をバタバタさせてもがいてたら、首の拘束はふっと消えた。

なんなのこのサド手品師！！

「……はあっ、ぼ、暴力反対……」

大きく肩で息をしながら、訴える。

こんなんじゃ身が持たない。

でもクーロンさんは、まったく、全然、何にもこっちの話を聞いちゃいなかった。

「地獄は信じるのに、別の世界があるってことは信じないの？」

「……いや、地獄があるかどうかは別にして、私の世界ではわりとメジャーな概念なんで。

でも、異世界とかはちょっと……」

そう言うと、彼は何かを考えこむ。

このマイペースっぷりはいつそ尊敬できる。さすが自称王子。

ジト目の私を華麗に無視して、クーロンさんは何かを思いついた目をした。流れるような動作で、私の右手を左手で取った。

さらりと触れた彼の手は、ひどく冷たい。

こんな美形に触れられてるのに、ときめくどころか、強烈に嫌な予感しかない。

「な、何をするんですか？」

「まあいいから」

彼は、酷薄そうな漆黒の双眸を細くした。

「これなら、ここが別世界だって信じるんじゃないかなあ」

クーロンさんは、私の主張をあつさりスルーした。さっきの、「暴力反対」を。

彼は空中から小さなナイフを取り出すと、あいていた右手でそれを握る。

「サイババ!？」 と驚愕した私に、「なんだよそれは」 と眉をしかめる。

そして、鋭い刃で躊躇なく私の掌を傷つけた。

「あつ……っー」

反射的に手を引いたけど、遅かった。
ざっくり切れた掌から、血が滴る。

「ちょっと、なんてことするんですか！！ 嫁入り前の娘に傷つけるとか！」

ポケットから取り出したハンカチで傷を押さえる。
押さえながらきつく相手を睨んだけど、髪の毛ほどの心の痛みすらもたらさなかつたみたいだ。
涼しい顔してんじゃねーぞこのやろっ！

最初は熱いだけだった傷口が、じんじんと痛み出す。
傷口から溢れた血で、ハンカチが赤く染まった。

「……ほんとに、なんなんですかっ」

クローンさんは相変わらず嫌な感じの冷笑を浮かべたままだ。

「その手、見せて」

彼は、再び私に手を差し出す。

「やです」

「見せて。もうひどいことはしないから」

優しい猫なで声。なのに、キツイ圧迫感を覚えるのはなぜかしら。

就職活動の時の圧迫面接よりキツイわ。

迷っていた頭の裏に、さっきの喉を絞められた苦しさがよぎる。本能が発した「逆らってはダメだ」という警告に、弱い自分が屈してしまった。

「……ほんとはですか。ひどいこと、しませんか」

「しないしない。ほら、手」

……なんか、軽いなあ。そう思いつつ、しびしび掌を差し出した。

「その布、外して。汚い」

「……」

……んつとに、ハンカチが汚れたのは誰のせいでしょうかね!!
と言いたいのをこらえて、布を外す。

目の前の美形が、怪我をした私の右手を取って軽く目を閉じる。
形のいい、柔らかそうな唇が、小さく何かを呟いた。

……手を伸ばせば届く距離で見るクーロンさんの美しさに、私は改めて息を飲んだ。

閉じられた睫毛は、すごく長い。

肌は陶器みたいにすべすべだし、鼻筋もすつと通っている。

見れば見るほど、彼の美しさに心を奪われてしまう。本当に美しい人だ。

ただひとつ残念なのは、心がドス黒いってことかしら。

私は、痛みを忘れて彼に見入っ……アレ??

い、たくない……………?

視線を下げると、ぼんやりした光が目に入った。

ワット数の低い白熱灯みたいな、ほんのり暖色があった、白っぽい光。

その光が、クーロンさんの手を包んでいる。

違う、彼の掌が発光してるんだ。

彼の手からあふれる光が、私の傷ついた掌に触れている。

目を細めてよく見ると、さっきまで血を流してたはずの掌の傷跡が、

……きれいさっぱりなくなってる!!!!?

「なんで…………!??」

彼はすつと手を離れた。

同時に光が消える。

「ほんとに、痛かったのに。血も出てて…………」

目を白黒させて、右手と、血で真っ赤になってる左手のハンカチを見比べる。

あの怪我は、幻覚なんかじゃない。もちろん、すつごく痛かった。なのに、まるで何事もなかったかのように、跡形もなく傷口が消えている。

混乱する私に、クーロンさんは「ほら、直してあげたよ。感謝してよ?」とこれまた手前勝手なことをのたまう。

どこからつつこんだらいいの。っていうか、ハリセン持ってきていいですか。

「……………な、なんなんですか、今のは」

私の心は彼に言いたいことであふれかえってたけど、その辺は社会人生活で培った自制心により、堪える。

ほら、クーロンさんも尋ねてほしそうな顔してるしね?
このどや顔は、ちょっとむかつくけどね?

「魔法だよ。君たちの世界にはないんだろ?」

得意げにふんぞりかえって、クーロンさんは答えた。……………え、今なんて?

「ま、まほう、ですか?」

「そうだよ。何なら、もっと見せてあげようか? 腕を折ったらさすがに直すの大変だけど、できないことはないよ」

「いやもう結構です!!!」

頭をぶんぶん振りながら即答した。

いくらなんでも、そこまで体張って確かめようなんて思わないし！
完全に納得はしてないけど、私は頷いた。
ここまでいろんなものを見せられて、否定する方がおっくうになっ
たっていうのもある。

「わかりました、信じます。ここは私の住んでた世界とは違う、ヴ
イ……ってとこなんですね」

「ヴィスール」

「そうでした、ヴィスール。うん。で、私、いつうちに帰してもら
えるんでしょうか？」

何でもいいから、家に帰ればそれでいい。

この人から、できるだけすみやかに、そして遠くに離れたい。

期待と疑念が混じった視線で、私は彼を見上げた。

クーロンさんは、「やっと本題に入れる」と唇を吊り上げた。

私の勘が正しければ、この人、今ゼツタイに良からぬことを考えて
るわ。

だってこんな黒い笑顔、どう見ても悪役が見せるものだもの！

嫌な予感がしつつも次の言葉を待っていた私に、クーロンさんは唇
の端を吊り上げたまま、

「君は、この世界では魔女なんだよ」

と告げた。

五話

魔女。

相変わらずこの人の話には脈絡がない。

三角帽子つけて箒とか持てばいいの？

それとも、あれか。

赤いリボンカチューシャと、黒ワンピースに黒猫、モップが好みか。

で、「わたしは元気です」とか言えば許してくれるかな！

混乱する私の心の声は、どうやら相手には届かなかったらしい。

「こっちの事情は歩きながら話すよ。じゃあ、行こうか」

「………ついていく前に確認したいんですけど、それって危険はないんですか？」

私は、その場に留まったまま聞いた。

冷静になるのよ私。この人のイカレっぷりなら、生贄とか人体実験とか、ぜんぜんあり得る。

うかつかついていたら、どうなるかわかったもんじゃない。

「危険はないし、すぐ終わる。そしたら元の世界に帰してあげるよ」

「えっ本当にっ!?!」

思わず食い入るように彼を見つめた。

元の世界に戻るってことは………つまり、このみょうちきりんな美

形サドから解放されるってことでしょうか！

「本当の本当ですか？ 王子様の名にかけて約束してくれますか？ つつ！？」

「しつこいな」

何度も念を押す私に苛立ったみたい。クーロンさんのまとう空気の温度が下がった。

びよおおおって吹き荒れるブリザードの幻が見えたわ。

しかもこの人、怒ってても冷笑を浮かべたままってるのが怖いのよっ！
クーロンさんの苛立ちに恐れをなして、仕方なく私は頷いた。こうなったら腹くるしかないじゃないっ。
もう首絞められたくないし。

「……わかりました。協力しますから、さっさと行きましょう」

「物わかりが良くて助かるな」

クーロンさんの冷笑が微妙に変化した。

表情はほとんど変わってないけど、上機嫌になったみたい。

でも、その嬉しそうな顔つてのが、なんていうか……とっても 邪悪 なのよね。

とにかく、なんでもいいから、一刻も早くこんな人とはおさらばしたい。

ヤバそうだったら、隙を見て逃げてもいい。

……自分の運動能力は、まあ、先ほど披露した通りなんだけどね。

そもそも、最初にこの人と遭遇したときにコケなきやこんなことに

は……

うん、いいじゃない過ぎたことは。

これからどうするかの方が、はるかに大切よ。

螺旋階段の入口から暗い森の中へと伸びる一本の小道。クーロンさんはそこをスタスタ歩き出した。そして数歩先で、ぐずぐずしてた私をふりかえる。

「何してるんだ。早く来てよ」

「今、行きますからっ」

森の闇に溶けそうな黒づくめの彼のうしろを、私は急いで追いかけた。

どこか遠くで、何かの生き物の不気味な鳴き声が聞こえる。

なんとなくだけど、ハトに似てるような。クルツポー、クルツポーってのを、ニオクターブ低くした感じよ。

だからほら、鳥よ。たぶん小さな鳥だと思うのよね。人間とか襲えないくらいの。

近くで何かガサツと動いて、私は「ひうつ!？」と悲鳴を上げてすくみあがった。

先を歩くクーロンさんは、ふりかえりもせず忠告する。

「この辺には、毒を持ってる夜行性のトカゲがいるから、気を付け

て」

「毒!？」

「それも、けっこうでかいよ? 君より少し小さいくらいかなあ」

「いったい、この見知らぬ場所で、そんな巨大な毒トカゲに何をどう気をつけろと。」

「悪いけど、爬虫類は苦手なのよっ!」

「とりあえず、私はクーロンさんのすぐそばを歩くことにした。」

「本当はあまり、お近づきになりたくないんだけどね。」

「びくびく周囲をうかがいながら隣にやってきた私を、流し目で一瞥して、彼は本題を切り出した。」

「僕が君をここにつれてきたのは、ある封印を壊してほしいからなんだ」

「封印……?」

「そう。数百年前、君みたいに、このヴィスールに召喚された女がいたんだよ。」

「彼女は、グラスムンド城の奥深くに、ある封印を施した。そして、異界の聖女と呼ばれた」

「はあ、そうなんですか」

「なるほど、すっごくファンタジーですね。」

「ていうか、彼女もいきなり拉致されたのかしら。」

「だとしたら同情しちゃうけど……聖女っつーくらいだから、私より

はマシな扱いを受けたのかもしれない。

「聖女の封印の源となる力は、異界に由来する。ゆえに、この世界の力では、僕みたいな優秀な魔法の使い手でも解くことができないんだよ。

残念ながらね。だから君を召還した」

「そうなんですか、へー」

さりげない自慢は無視する。

それより、クーロンさんの言うところの私を喚んだ理由は、相当に理不尽な気がするんですけど……

私は、ふと首をかしげた。

「あれ。でも、私には、封印を解くなんてたいそうな力はないですよ?」

「あるんだよ。その指輪」

クーロンさんは、私の手をちらりと見た。

視線の先には、私が気を失ってる時にはめられたのであろう、ごつい指輪があった。

これ、実はさつきから気になってた。

何やらあやしげな模様が刻まれた金色の台に、不思議な色のでかい石がくつついた指輪だ。

虹色の輝きを帯びた石は、森の暗闇の中でさえ、ほのかな光を放っているような気がする。

高価そうだし、質屋に持っていったら高く売れるかしんない。

クーロンさんはその指輪を顎でしゃくった。

「それは、君の力を抑える指輪だ。よく思い出してごらんよ。君の今までの日常で、さわってもないのに近くの方が動いたりしたことはなかった？」

「……………え……………」

……………気のせいだ、

ずっとそう思ってた

「……………わ、かりません」

喉の奥に、声が出っかかる

指先が冷たくなる

クーロンさんは青ざめた私に気がついた風もなく、肩をすくめた。

「気がついてなかったんなら、別にいいけど。」

とにかく君は、聖女と同じ力を持つてる。それは間違いない」

「……」

「君の力は、君がいた世界ではごく弱くしか、はたらかない。けど、この世界にあつては恐ろしく増幅するんだ。元の百倍くらいにね。」

だから、王家に伝わるその指輪で、力を抑えさせてもらったよ」

例の嬉しい時の暗黒微笑を浮かべて、クーロンさんは話を続ける。
黙りこんだ私とは対照的に、いつになく饒舌だ。

「ちょうどいい力の人間を見つけるの、大変だったんだよ？ 強すぎたらこの世界自体を破壊しかねないし、弱すぎたら封印を解けないからね。」

君をこつちに連れてくるのもひと苦労だね。異界を渡るには、難しい術で魂と肉体を二段階で転送しなくてはならない。だから、君を昏倒させて魂を体からひっぺがすのが一番、手取り早かったんだ。

殺さない程度の力加減って、案外難しいんだよ？ 成功して良かった」

感謝しろ、とでもいいかげなクーロンさんの口調に、そんなの頼んでねえわよ！ と私は絶叫しかける。

それを抑えて、「ありがとうございます」と力なく呟く。

だから撲殺されかけたのか、私は……

……なんかもう、理不尽にもほどがあるわ。

あれ、でも頭は痛くないわね。
私が寝てるうちに、さっきの魔法とやらでタンコブを治してくれたのかしら。

それはともかく、クーロンさんがもたらした情報を私は頭の中で整理していく。

そのとき、何かが引っ掛かった。

「……あの、聖女様の封印とやらって、きつと、すごく大事なものですよね。私なんかが、解いちゃっていいんでしょうか？」

「君は気にしなくていい」

冷笑を浮かべたまま、素っ気なく答えたクーロンさんの機嫌が急降下する。

わわっ、今度はシベリア寒気団がっ！

「いや、変なこと聞いてすみません」

ちくちく皮膚に突き刺さる冷気に、冷や汗を流しつつ謝った。

それから、黙々と歩くこと数十分。

ずいぶん広い森だ。

赤い月が、幾重にも重なった葉の隙間からときどき顔をのぞかせる。ようやく森が切れて、終点が見える。そこで私は目を睜った。

某夢の国のシンボルに似た、でもそれよりもずっと巨大な、白亜の

お城が目の前に聳えたっていた。

六話

天高く聳えるお城を仰いで、ぽかんと口を開ける。

月の光を反射して輝く白壁。

大小さまざまな尖塔を、積み木のように組み合わせた建物。
どこからどう見ても、お城だ。西洋風の。

いろんな大きさの尖塔の屋根は、真ん中がゆるくふくらんだ円錐型
になってる。

壁や窓には、いたるところに浮彫の装飾がされてるけど、ゴテゴテ
した感じはまったくない。あくまで全体の調和が優先されてるんだ
ろう。いかにも上品だ。

シンデレラや七人の小人や美女と野獣が、踊りながらこっちにやっ
てきそうだ。

あ、そろそろ首が痛くなってきたわ。

だって、お城のてっぺんは、新宿のビルくらいありそう。

「……いつまであんぐり口開けてるの？ さっさと行くよ」

そこで、絶対零度の声。

クローンさんの一瞥で我に返る。

お城が見えたとはいえ、まだ森を抜けきってない。

やばい、こんな場所においてけぼりにされたら、まじで路頭に迷っ
わっ！

「まっってくださいっ！っ！」

お城観賞はおいといて、大慌てで同行者の後を追いかけた。

クーロンさんは、城の外側をかこむ城壁をめざして歩いてく。

城壁は、壁と同じ白い石を積み上げたもの。

ただどお城よりも威圧感がある。すごく頑丈にできてそうだわ。

私は間近に迫った城壁を見上げた。

お城とは比べるべくもないけど、それでも、四、五階分の高さはあるんじゃないかしら。

正面を向くと、がっちり組まれた石の城壁に、それほど大きくない門が、ひっそりと私たちを出迎えた。

携帯アプリでドラ エやったことあるけど、あれに出てくるお城って、裏口があったりするじゃない？ ちょうどそんな感じの門。

木を鉄で補強したその門の両脇では、大きな松明が燃やされてる。そのそばに、お城の一部のような門番が静かに立っていた。

私たちが門のそばまで来ると、彼らはさっと居住まいを正して頭を下げる。置き物みたいだった門番の一人が、私をちらっと見て、口を開いた。

「殿下、お戻りで」

「ああ。勤めご苦労。門を開けてくれる？」

「はっ」

……殿下。

顔を引きつらせた私の視界で、ギギギ……と重い音がして門が上がる。

「行こうか」

クーロンさんにうながされ、門番たちに会釈して城壁を通り抜けた。彼らも軽く頭を下げて、持ち場に戻っていく。歩き出した私たちの背後で、門が再び閉じられる。

夜の空気に、かぐわしい香りがまぎって、鼻孔をくすぐった。白い砂利が敷きつめられた小径には、塵ひとつ落ちてない。その脇に作られた低い生垣や花壇には、美しい花々が咲き誇ってる。城壁の内側は、このお城の中庭にふさわしい、美しい庭園が広がっていた。

そこに佇むクーロンさんは、とても絵になる。

「つか、この人ほんつとに王子だったのね……殿下って呼ばれてたわよ。」

サラサラした黒髪が揺れる後頭部を、穴があくほど凝視する。私のガン見に気づいたのか、彼は肩越しにふりかえった。

「……何。僕が王子だって、まだ信じてなかったの」

「めっそうもございませんっ、信じてましたよー!!」

ぶんぶんと首をふりまわす。

一方、彼は唇の端を吊り上げた。うわ、なんかイヤな予感っ。

「じゃあ何。さっきの熱い視線は。玉の輿にでも、乗りたかったの」

「？」

「へー!?」

私はふりまわしてた首をストップさせて、目を丸くした。そしてすぐに思考を止める。ちょっと考えただけで、背中に嫌な汗が流れてく。

「わ、私はあっちの世界で汗水たらして働いて、自分に見合った男性を見つけるつもりですよ？ 玉の輿なんてとんでもないですよ！ クーロンさんにはもっと似合う女性が」

「クーロンさん」

「あ、しまった、えーと殿下」

軽く瞬きしてた黒の双眸が、すっとすぼまる。

「別にいいけど、クーロンさんで。……そうだね。僕としては、異界から来た乙女と結婚するのも戦略的にはありかな」

「え？」

彼は一步踏み出して、私との距離を詰めた。

名匠が腕をふるった彫刻のような、極上の顔がすっと近づく。しなやかな指であごを軽く持ちあげられ、上を向かされた。漆黒の瞳が、私の両目を覗きこむ。

「ねえ。あくせくしなくてもいい暮らしをさせてあげるよ。この世界に留まってみない？」

周囲に漂う花の香りが、いつそう濃くなった気がした。息がかかるほど近くで見つめられて、クラクラする。勝手に頬に血がのぼってしまふ。心臓が、痛いほど高鳴る。

……ひとつ断っておく。これは脊髄反射だ。

普通の美的感覚を持つてる人間が、こんな極上のイケメンに鼻がくつつきそうな距離まで接近されたら、みんな同じ反応すると思うんだよね。

「じ、じょうだん、ですよね」と目を泳がせて動揺する私。

上気した私の顔をじっくりながめてたクローンさんは、冷笑を一ミリも動かさずに、顎に触れてた手を引いた。

彼は「冗談に決まってるだろ」とそっけなく踵を返す。

「かつての聖女は絶世の美女だったらしいけど、確かに君は平凡すぎるよね。僕の隣には似合わない。ほら、行くよ」

「か、からかわないでくださいよっ」

……あれ、でもなんか怒ってないですかクローンさん……気のせい？ さっさと歩き出した彼の、氷雪ふきすさぶ背中を小走りで追う。

小径の砂利をざくざく踏みしめながら、両手で軽く押さえた頬は、少しだけ熱を帯びていた。

庭園を抜け、小径の正面にいよいよ城の入口が見えてきた。

木製の扉には幾何学的な溝が掘りこまれているけど、鍵穴とか取っ

手みたいなのは一切ついてない。

これ、どうやって開けてもらうんだろう。

私が内心首をかしげてたら、クローンさんが小さく言葉を紡いだ。

……そしたらドアがひとりでに開いた。

「自動ドアですかっ!？」

「そういう言い方もできるかもね。これは、魔法で認証してるんだよ」

「へええー。すごいですねえ」

感心しながら、開いた扉から城の中へ足を踏み入れた。

薄暗かった廊下の天井に、ぽっぽっと明りがともる。なるほど、ここも自動なのね。

等間隔に並ぶ光は、クローンさんが私の傷を治すときに見せた魔法の光に、よく似てた。

足を踏み出したら、床に敷かれたふかふかの絨毯に、ヒールの踵が沈みこむ。

さてこの廊下、はるか遠くまで続いているんですが。

私、どこまでこの人についてかなきゃいけないのかしら……? ?

……とげんなりしてたけど、目的の場所は意外と近かった。
正確に言つと、事実は少し違う。

数分ほど歩いた先で、クーロンさんはもう一度、魔法認証の扉を開けた。

扉の向こうには、床に不思議な文様が描かれた小部屋があつた。

いくつかの円と、サンスクリット文字に似た図形を組み合わせた床の文様は、私が目覚めた部屋にあつたものとそっくり。

クーロンさんは、ためらわずにその文様の中央に立った。

「僕の隣に」

彼に手招きされて、おっかなびっくり紋様の上に足を乗せる。

そして、長身のクーロンさんの隣に並ぶと……

「な、なんか光ってますよ!?!」

「いちいちうるさいから。黙ってて」

「んなこといったって……ま、まぶし……!」

足元の文様が、白く輝きはじめる。

その光が強くなってって、思わず目を瞑ってしまう。

そして、次に目を開けた時、私たちはさっきとはまったく違う空間にいた。

七話

そろそろ、いいかしら……？

まぶた越しに薄闇を感じて、ゆっくり瞳を開ける。

辺りをきよろきよろと見回して、目をしばたたかせる。

どうやら、たった一瞬で、私はここに連れてこられたらしい。

短い廊下のような、細長い空間。その一方の行き止まりを背にして、私たちは立っていた。

正面には、青い扉。

「クーロンさんクーロンさんっ！」

「……何？」

一瞬妙な間があつて、甘くて低い声が返ってくる。

でも、この状況に興奮してた私は、それに気がつかなかった。

「今のも魔法なんですか!？」

「そつだよ」

「すごい。魔法って、いろんなことができるんですねえ。不思議だけど、面白いなあ」

うんうん頷きながら、しきりに感心する。

中世ばい雰囲気の世界だけど（お城とか王子とか）、ある面では、私の世界より便利かもしれない。

「家と会社をこの魔方陣で繋いだら、すごい楽ちんだろうなあ。

あ……でも私、会社クビにされたんだっけ。そしたらハーワー
クと家をつないだらどうか。いや、それはちょっと微妙か……」

ぶつぶつ独り言をつぶやく私を、クーロンさんは珍獣を見るような
目つきで見た。

「……魔法を否定したと思えば、あっさり受け入れてはしゃいでる、
君の方が不思議だよ」

「ええっだって便利じゃないですか！ どこでもドアはあっちの世
界の人類の夢なんですよ！」

「どこでもドア……」

冷ややかな沈黙。

あ、ブリザードが来そうだわ。

私ははしゃいだ表情をしまつて、しかつめらしい顔を作ってみせた。

「で、あの、封印の場所ってまだ先なんですか」

ここがどこなんだか、さっぱり見当がつかないけど、クーロンさん
が『封印』のある場所に私を連れて行こうとしてるなら、ここはま
だお城の中なんだろう。

さっき、「封印は城の奥深くにある」って言ってたしね。

おずおず長身の彼を見上げると、闇よりも濃い、黒の双眸と目があ
った。

「ここが、封印の間だ」

「え……意外と……いやなんでもありません」

意外としょぼいな。

とは口に出さずに胸の中だけでつぶやく。

見上げるほど天井の高い大広間や大神殿を想像してたけど、ここはそこまで広くない。

さっきの廊下より幅が広いくらいで、五メートルくらい。奥行きは十五メートルくらいかしら。

（といっても、私のアパートの部屋四個分くらいは、余裕でありそうなんだけどね）

祭壇なんかも見当たらない、ただの四角い空間。

何となく、最初に水をぶっかけられた地下室に似てるかしら。

……あ、やなこと思い出しちゃった。

この、封印の間には、明りは灯されてなかった。

そのかわり、壁の上部に等間隔に並んだ大きめの窓から、赤みを帯びた月の光が射しこんでいた。

窓には、子供がようやく通れるていどの間隔で、青銅の格子がはまってる。

私たちの真正面、突き当たりの部分は、両開きの扉になっていた。

月明かりに目を凝らしてみる。そして、私は悟った。

数百年前、この地に降り立ったという、聖なる乙女。

異界の聖女は、あの向こうに何かを封印したのだろう、と。

宝石のような輝きを放つ、一對の扉。

硬質な光沢を纏う表面は、さつき城に入った時使った扉より、さらに複雑な文様で覆われている。

青い水晶か何かでできているのか、月光を透過するそれは、透き通った深い海みたいだ。

「あれを壊してほしいんだ」

異様な存在感をはなつ扉を、軽く指さして、クーロンさんは言うてくれる。

私は顔に困惑の二文字を浮かべた。

「あの、どーやって……？ ものすごく頑丈そうなんですが」

ごくごく真つ当な質問に、クーロンさんは薄ら寒い笑みで答えた。

「吹っ飛ばすに決まってるだろ。君の力で」

「ええ！！？ んな強引なやり方でいいんですか！？」

「いいんだよ。それ以外に方法はないしね。……ねえ、その指輪を外して？」

「はあ」

言われるままに、右手の中指にはまっていた指輪を抜き取る。

「僕が預かっておく。一応、王家の宝物だから」

王家の宝物。

私の喉がゴクリと鳴る。売ったらすごい値段がつくかも。……売ろうとした時点で殺されそうだけど。この人に。

気を取り直して、「それで、どうすれば……？」と尋ねたら、受け取ったごつい指輪を掌でもてあそびながら、彼は言った。

「イメージするんだ」

「イメージ、ですか？」

「そう。とにかく、暴力的なイメージだよ」

ざっくりした返答だ。ざっくりしすぎてわからない。

「……はあ、わかりました。とりあえずやってみますね」

これ以上聞いても無駄そうなので、とりあえずやってみるか。扉の前に移動して、深い海のような青と正対する。

深く息を吸いこむ。

イメージは決まった。

『バコッ』

もういっちょ！

『ボグッ』

今までの仕返しとばかりに、脳内でクーロンさんをタコ殴りにする。

「……君、何か失礼なこと考えてない？」

「えっ！？ まさかッ！ 兄と喧嘩してるイメージを浮かべてるだけですよ！！！？？」

背後の声に、ギクツとして体が強張る。何でわかったんだろっ。魔法って心も読めるの？

「だったらいいけど？」

肩越しに相手の顔色をうかがう。氷のような双眸が、こちらを射抜くように見つめてた。

……やばい。万が一バレたら怖いから、違うのにしよっ。

えーと、暴力、破壊……あ、そうだ。

昔、お兄ちゃんと一緒にテレビで見た、戦隊ものの爆発シーン！あれにする！

目を閉じて、なるべく鮮明に思い出す。

原色カラーの戦隊スーツを身につつんだヒーローが、機敏な動きでポーズを決める。

お兄ちゃんと、よく真似したな。懐かしいな。

それから……彼らヒーローの背後で起こる爆発を、ちょっと大げさに脳内再生してみる。

それじゃ、いつてみるわよ……

耳をつんざくような音と、地面が揺れるほどの衝撃。

石が砕け、砂煙が吹き上がる。

爆風が、一帯にあるもの全てを揺らす。

そうやって一連の爆発を想像した時、不思議な感覚が起こった。体の奥から未知のエネルギーが湧きあがって、凝縮されてゆく。

「わ、つぶ……！？」

足元から強風が巻き起こる。

その風を避けるように、両腕で顔を庇い、一步後退する。

竜巻のように渦を巻く風が、肩口で揃えた髪をなぶり、スーツの裾をはためかせる。

次の瞬間。

目には見えなかったけど、はっきりと感じた。

不思議な力が、体を飛び出して、前へ向かってくの。

その見えない力が、扉に正面からぶつかる。

けれど、扉もまた、見えない力で守られてたみたいだった。

青い扉の、ほんの十数センチ手前で、私の力はその守りの力と衝突したらしい。

二つの力が接触したせいかわからないけど、瞬間、力は見えるものへと変化した。

白と赤の炎が吹き荒れて、扉の一带を包みこむ。

「なに……！？ あ、あつっ」

ほんの一瞬せめぎあった炎は、ごうつと音を立てて四散した。

本物の炎のように、発散する熱が空気の温度を上げる。

荒れ狂った風によるめいた私の耳に、その時、ほんの小さな音が聞こえた。

ピシリ

ガラスにヒビが入ったみたいなの、小さな、軋む音。だけど、確かに聞こえた。

それを捉えたのだから、私の目や耳なんかの感覚器官は、正常に動いてたはず。でも、それを認識するはずの私の意識は、暗い深淵にとらわれたかのように、停止していた。

やっぱり、わたしは

『溜依』

『溜依、おいで』

おねがい　ゆるして　ごめんなさい　ごめんな

風と炎がおさまってしばらくしても、呆然と立ち尽くしてた。
金縛りにあったみたい、動けなかった。

「……僕の見立てに間違いはなかった。君なら、壊せる。もう一度
やってみてよ」

「え……は、はい」

クーロンさんの、どこか嬉しそうな声。

氷のようなその声音で、自分のいる場所を思い出す。
記憶の底からよみがえりかけた感情を振り払う。

そうだわ。

この人の望みを叶えて、元の世界に帰ること。

今、考えるのはそれだけ。それだけよ。そうでしょ……？

「やります」

深呼吸して、再び扉に正対する。

もう一度目を閉じて、まぶたの裏で、あの爆発を想像する。

二度目は、さっきよりもっと手ごたえがあった。

不可思議な力が生まれ、私の体内の圧を押し上げていく。

……爆発のイメージを呼び起こす寸前。

頭の中に描きかけたイメージは、後ろから聞こえた何かで、霧散し
た。

私たちしかいないはずの空間に響いたそれは……低い、獣の低い唸り声？

イメージの残骸がなくなると同時に、体から溢れそうだったエネルギーもしぼんでいく。

「……これはこれは、兄上。地下牢を破って、ここまで辿りつくとは、さすがだ」

クーロンさんの冷ややかな声が反響した。

慌てて後ろを振り返る。

黒い服を纏った長身の背を、こちらに向けて、クーロンさんは封印の間の奥を睨みつけてた。

後ろ向いてるから直接はわからないけど、でも、絶対あれは、何かをおっそろしい目で睨んでるに違いなかった。

だって背中に、やばいくらいの冷気をしょってるし！

状況がつかめずに、彼の背中ごしに、私は懸命に目をこらす。

そして、本能的な恐怖を覚えて、喉を鳴らした。

クーロンさんが相対する薄い闇の向こうに、銀色の塊が佇んでた。

つややかな毛並みに覆われた、強靱そうな四肢。

唸り声が漏れる口。そこから覗く、鋭い牙。

水色の瞳に浮かぶ光は、どう考えても友好的なものじゃない。

それは、雪のように輝く、見たこともないほど大きな白い豹だった。

……え。
ちよつと待ってクローンさん。その動物が
兄上？

八話

確かに、「兄上」って呼んだよね、クーロンさん。でもその相手は、どう見ても白い豹だった。

それは、明らかに私の知ってる豹よりでかい。

その上首の周りに襟巻みたいなフサフサのたてがみがあって、なんだか神々しい。

この豹と兄弟の契りを交わしたんなら、それはそれですごいわ。

そう思った時、ふっとクーロンさんの腕があがった。

掌を白い豹に向ける。

「煉獄の炎よ、出でよ」

混乱する私をよそに、兄弟(?)はとつてもマジカルかつファンタスティックな攻防戦に突入した。

クーロンさんの語尾に重なるように、ごうつと音を立てて炎の壁が燃え上がる。

獣とクーロンさんを隔てた炎は、クーロンさんの胸の高さで一点に集まり、獣に向かって弾けた。

うわわー、こういうの友達の家で見たわ！

ゲームだったけど！

一方、身を低くした白豹が、地を蹴る。

全身、バネでできてるみたいだった。

敏捷な四肢は天井近くの壁を蹴って、もう一度反対側の壁で跳ねる。

白い獣は、重量のありそうな体を柔軟に擦ってスタツと着地する。

「……っ！」

背後を取られたクーロンさんが振り返る前に、獣はもう一度跳躍した。

黒づくめの長身に体当たりをかまし、前足で彼の体を押さえる。

「クーロンさんっ！」

私の叫びが反響する。

その残響が消えるのと同時に、チャリン、と小さな金属音がした。倒れているクーロンさんのそばで、金色の光が反射する。

クーロンさんのポケットから、あの指輪が落ちたんだ。

クーロンさんを助けなくちゃ……！！

敵だか味方だかよくわからない人だけど、あの人がいなきゃ私は元の世界に帰れない。

……とか、冷静に考えたわけじゃない。

目の前の襲われてる人を助けようと、必死だったただけだ。

頭の奥に、爆発のイメージを奮い起こす。

でも、あせってうまくいかない。

これじゃあ、さっきの半分以下の力しか出ないだろう。

不思議な力が凝縮し、ほとばしる。

せまりくる私の力に気づいて、白豹は身を翻した。

自由になったクーロンさんも、横に転がってよけた。

ガリガリ、と不快な音がする、
あ、床が削れたつばい。

「僕まで殺す気か！」

「す、すみません！」

怒鳴られて、首を竦めた私の顔に影がかかった。

私に狙いを変えた獣が、音もなく距離を詰めていた。
今度は、自分が太い前足に押さえつけられる番だった。

「うっ……」

ドツと鈍い音。

背中を床に打ちつけて、くぐもった呻き声が喉から漏れる。
ぶっとい足で胸をぐっつと圧迫される。

く、くるし……息が……

薄く目を開けると、獣が大口を開けて私の喉を食い破ろうとしていた。

赤い口と、鋭い牙。

目を開けなきや良かった。

心から後悔したけど、遅い。

そのとき、獣と目があった。

水色の瞳に、おびえた自分の顔が映ってるのが見えた。

豹の目に映る私の奥に、ためらいが浮かぶ。

ピタリ、と獰猛そうな顎が動きを止めた。

(…………た、たすかった?)

そう思った瞬間、獣の口が再びくわつと開いた。
ちよ、何そのフェイント！ ありえないし！

……と思ったけれど、獣は私を殺しはしなかった。
私のスーツの襟元をくわえると、ぶわつと空中に放り投げる。

「おああう!？」

宙を舞った私の体を、もふつとした背中が受け止める。
反射的に、しがみついた。

同時に白い獣は走り出した。
クーロンさんのそばをすり抜ける時、床に転がっていた指輪を素早く口にくわえる。

「逃がすか！」

背後から、クーロンさんの声が響く。

ぶわつと炎の壁が、私たちの行く手を遮った。

(私を殺す気か！ 人のこといえないじゃない！)

クーロンさんにツッコミを入れつつ、炎の勢いが恐くて、目の前のモフモフしたたてがみにぎゅつとしがみつく。

密着した白豹の筋肉が、毛皮の下でしなやかに力を溜めた。
力強い四肢が地を蹴る。

2メートル以上はありそうな壁を、ひと一人を背負った獣は軽々と飛び越えた。

着地すると同時に走り出す。

魔方陣を目指してるんだ。

その予想通り、行き止まりの手前の陣の上に獣が乗ると、文様が怪しく光りだした。

「煉獄の炎よ、敵を燃やし尽くせ！」

「ちよ、クローンさん!？」

魔方陣の上で向き直った白豹の背で、絶句した。

完全に逆上したクローンさんは、炎の球をこっちに向けて放ったのである。

ひと抱えはありそうな燃えさかる赤い球。

おま、本気でこのモフモフごと殺す気ですか!？

解けた鉄の塊みたいな魔法の炎は、自分に差し向けられるとなるととてつもなく恐ろしい。

マジカルでファンタジーよねとか思う余裕は、完全にすっ飛んでいた。

やっぱり、私ここで死んじゃうかも……! !

モフモフの毛皮に顔を埋めて、目をつぶる。

けれど、炎がここに届くより一瞬だけはやく、魔法陣の光が最高潮に達した。

私と、獣の姿がすつと消える。
魔法の炎は何もない空間を通過し、後ろの壁を焦がして飛び散った。

九話

魔方阵が描かれた小部屋を、獣は矢のような勢いで飛び出す。薄目を開けると、魔法認証の扉は木っ端微塵になっていた。

このモフモフが壊したのかしら。だとしたら、底知れないパワーだ。

元は扉であったものを踏み越え、獣は廊下を疾走した。

さっきクローンさんとやってきたルートの逆をたどる。中庭に出る扉まで、ほんの数秒。

その優美な扉の前で、獣はスピードを落とすどころか、ますます加速する。

「ちょ、ぶつかるっ……!!」

バゴーンッ! と激しい音が響く。

扉は、蝶番ごとぶつとばされた。

なるほど、さっきの扉もこうやって突破したわけね! などと感心してる暇はない。

「ひええええ……!!」

声にならない悲鳴を上げる私を背中に乗せたまま、獣は中庭を突っ切る。

「……アルス殿下の乱心だ！」

「とらえるー！」

叫び声を上げて、わらわらと現れる兵士たち。

彼らに追いつかれる前に、獣の足に力がこもって弾けた。

（あ、ありえない……！）

何て脚力だろう。

見上げるような高さの城壁を、いともたやすく飛び越えてしまった。

スローモーションで宙に弧を描く私たち。

地上からだと、E.Tの有名なシーンみたいに見えるかも。

ほら、今、満月だしね！

城壁の真上で頂点に達して、ふわっと無重力状態になった体が、急降下する。

「あばばば……！」

私の家は貧乏だったのよ！

遊園地の絶叫系なんか、乗ったことないわよ！

初めて味わう自由落下の恐怖。

ひたすら、たてがみにしがみつく。

地上にぶつかる手前でぎゅっと目をつぶる。

だけど、重力の法則を無視して、獣はすちゃっと地面に降り立った。

落下の衝撃は、ほとんどない。
これも魔法なのかしら。

ここで下ろしてもらえるのかな、とかつて考えがよぎった。
けど、甘かった。

大きな銀色の影は、暗い森に向かって走り出す。
もちろん、よれよれの私を、背中に乗せたまま。

どこをどう走ってるのかさっぱりわからない。
振り落とされないよう、ぐっと両手両足に力をこめる。

顔に藪や葉っぱが当たって痛かったけど、気にしてらんない。

周囲を見てる余裕などなかった。
だけど本能が反応したんだろう。

鋭い殺気に、視線を上げた。

視界の隅に、私たちと並走する黒い影がよぎる。

一瞬、鬱蒼とした森が途切れた。
ぽっかり空いた空からのぞく、紅い月光の下、影はその姿を現す。

私がつかまってる銀色の豹によく似た姿。
でも、色はカラスの羽根のような漆黒だ。

敵意に満ちた、闇よりも濃い黒の瞳。

それが、私と銀色の獣を捉える。

黒豹が飛びかかるのと、銀色の獣が跳躍するのは、ほぼ同時。

鋭い牙が、手を伸ばせば届く位置まで迫る。

けれど、銀色の獣は身を振り、それをかわした。

黒豹の咆哮が、空気を引き裂く。

銀色の獣は、かまわず走り出した。

背後から、ザザッと何か大きなものが迫ってくる音がする。
間違いなく、あの黒豹だ。

そいつは、すぐに追いついて、私たちの真横にピタリとつけた。

そこで気がつく。

私を背負ってる分、銀色の方は足が遅いんだわ。

残忍な光を浮かべた黒い瞳が、私たちに狙いを定めた。

……何かしなくちゃ、やられちゃう！

飛びかかるうとした黒豹が、四肢を縮める。

同時に、私もお腹にありつたけの力を込めた。

「……っ、この、ヒジキ野郎————————っ
——————」

ヒジキやるー…… ヒジキやるー……

必死の叫びが、森の中に木霊する。

あれ。そもそもこの世界に、ヒジキってあるのかしら？

……まあいい。

ヒジキの有無はともかく、効果はあった。

意表を突かれた黒豹の動きが止まる。

「いやったっ！ ……うわっ」

耳元で叫ばれた私の下のモフモフも、一瞬転びかけたけど、うまく立て直す。

行く手を阻む大きな倒木を、軽々と飛び越えた。

その先の森は、灰白の霧に包まれていた。

私に乗せた獣は、霧で閉ざされた森の中に駆けこむ。

銀色の影が、霧に紛れる。

……理由はわからないけど、黒豹は追跡をあきらめたらしい。私たちの後ろで、悔しげな咆哮が闇を裂いた。

十話

黒豹の襲撃から逃れた後も、私を背負ったまま、獣は森の中を走り続けた。

(どこまでいくんだろう……)

大きな首元に回した腕が、少しずつ痺れてくる。

そろそろ限界かも、と思った矢先、かなりの距離を進んでようやく安心できたのか、獣は少しずつ走る速度をゆるめ、枯れかけた巨木のそばで立ち止まった。

おもむろに腰を下ろすと、白銀の豹はお座りの姿勢のまま、こつちをちらりと振り向く。

どうやら、「降りろ」って言いたいらしい。

銀色の毛で覆われた背中を、そろそろと這い降りる。

すると豹は向き直って、くわえてた何かを私の足元に置いた。

これって……

「王家の秘宝の、指輪？」

氷のような薄い水色の瞳が、「それをつける」とでも言いたげに私の顔を見つめる。

「……これでいい？」

ひろった指輪をはめ、手を突き出して声をかけると、獣はくるっと背を向けた。

そのまま、すたすたとどこかへ歩き出してしまつた。

「ま、まっつて！」

霧で見失わないように、私は慌ててそのあとを追つた。

鬱蒼として霧がかかった森の中なのに、目の前を行く獣の足取りに迷いはない。

私はと言えば、でこぼこした木の根っこに何度も足をひっかけ、転びそうになりながら進んでいった。

そうして必死で歩くうちに、どこからか水の音が聞こえてきた。

獣はそこを指しているのかもしれない。

音はちよつとずつ近くなる。

そつえば私、この世界に来てから何時間かたつけど、水の一滴も飲んでいなかったんだっけ。

道に放り出したビールは、どうなったのかしら……などと考え始めたら、やけに喉が渴いてくる。

私はいつしか無心で両足を動かしていた。

疲れ切つた体には、静けさの向こうから微かに聞こえる水音が支えだった。

岩でできた自然の階段をのぼりきると、強い水のおいがした。

生い茂つた木々の隙間から、わずかな月明りを反射して光る水面が見える。

大樹に囲まれて、ひっそりと佇む小さな泉だった。泉の一部は流れ出して、小川を作っている。

思わず早足になって歩み寄り、その水面を覗いた。

「わ、きれいな水……」

水底の砂粒がはつきり見える。怖いくらいに澄んだ水だ。

獣は、私の隣にかがんで、水を飲みはじめた。

自分も掌で水をすくい、口に含んでみる。

下の上に転がる冷たい湧き水は、ほんのり甘い。今まで飲んだどの水よりもおいしい。

夢中になって掬って飲んだ。

「はー……おいしい。生き返るわぁ」

感動している私の横を、獣は音もなく離れた。

そして、近くの岩陰に大きな体を横たえる。

そこは枯葉が敷きつめられていて、むき出しの地面より幾分ましになっている。

休憩、ってことらしい。

そりゃ、人を背中にしょってあれだけ走ったんだから相当、疲れているに違いない。

(……私も、ちょっと休もう)

そう思った時、ぶるっと体が震えた。

「うー、さむっ」

今まで必死だったから気にならなかったけど、森の中は結構冷える。

ふと目に入った銀色のモフモフに、釘付けになった。

「ちょっと失礼しまーす……」

様子をうかがいながら、そっと獣に近づく。

大きな豹は、頭を前足に乗せて、じっと目を閉じている。

すぐそばまで近寄っても、ピクリともしない。

獣の腹のあたりに腰をおろし、そろーっと毛皮を抱きしめた。

……うん、あつたかいわー。

湯たんぽとして、ちょーどいい。

そうやって温まっていたら、急に眠くなってきた。

うとうとしはじめた頭で、とりとめもなく、一日を振り返る。

本当に、めまぐるしい一日だったなあ。

最後の出勤の帰り道、美形の王子様に殴られて、変な世界に拉致されて。

魔法、なんていう非科学的なもんを見せつけられ。

この銀の豹や、クーロンさん、黒豹に殺されかけるし

……何度も死ぬかと思ったけど、とりあえず生きてる。

あ、そだ。

「……私を殺さないでくれて、ありがとう」

小声で呟く。

意識が眠りに沈んでいくその途中で、獣の小さな唸り声が聞こえた気がした。

* * *

「おいアルス、起きんかい。迎えに来てやったで」

……すぐ近くで声がした。

あれ、私、寝てたのね。

「お？ この嬢ちゃん、変わった気配しとるな」

だれ……？

薄く目を開けると、鼻先に触れそうな位置に、見知らぬ男の人の顔があった。

「ひっ！」

「なんや、そない驚いて。傷つくわー」

ちよ、近すぎだろう！

ぎよっとして飛び上がると、相手は口の端を下げた。

「……わっ」

もたれかかっていた銀色の豹がすっと立ち上がる。
バランスを崩した体を腕で支え、私も慌てて立ち上がった。

いつの間にか、辺りはすっかり明るい。
一寸先も見えないほどだった霧は、ほとんど晴れている。太陽の光が燦々と森に差し込んでいた。

「えーと、おはようございます……?」

「おはようさん」

背の高いその男の人を見て、ひょっとしてこの豹の飼い主なのかな、と思う。

彼は獣を知っているみたいだし、獣の方も彼を警戒するそぶりを見せないから。

突然現れたこの男の人は、少し風変わりな恰好だった。

黒い髪は、鳥の巣のようにモサモサしている。

肌は、素焼きの陶器みたいなテラコッタ。その肌の上、右の頬と手の甲に刺青を入れている。

そして、アジアな雰囲気、カラフルな幾何学模様の服をまとっていた。

目元は髪で隠れてよく見えないけれど、顔の下半分で判断する限り、整った顔立ちだと思う。

年齢は、たぶん二十代後半くらい?

「詳しいお互いの自己紹介は、後回しやな。とりあえず、俺の家まで来いや」

そう言って、その男の人はニツと笑った。

「はあ……」

鮮やかな模様の服を翻して歩き出す彼に、獣とついていくこと数分。木々の隙間から唐突に、石造りの平屋が姿を現したのだった。

カップに注がれるお茶が、コポコポと柔らかい音を立てる。ふんわりと茶葉の香りがただよってくる。

「わいはイヴァリーちゅうもんや。嬢ちゃん、まずはこれでも飲んであつたまりいや」

イヴァリーと名乗った彼は、熱いお茶がたっぷり入ったカップを私に差し出した。

「どうも、ありがとうございます」

カップに口をつけると、甘い琥珀色の液体が喉を通っていく。その温かさが、全身にじんわり広がっていくみたいだった。私はほーっと息をついた。

ここは、イヴァリーさんの家らしい。テーブルにのつた謎の道具や本を、ずざざーっと払い落としたイヴァリーさんは、部屋の隅に転がってた椅子を持ってきて、私にすすめた。

その上、お茶まで出してくれた。本当に、いい人だ。

……この世界で初めて、人間として真つ当な扱いを受けた気がする！感動して、軽く涙が出そうになる。

カップを両手で抱え、お茶をしみじみ味わう。和むわあ。

その時、イヴァリーさんに歩み寄った銀色の豹が、「グルル……」と不満げな声を上げた。

「わかつとるってアルス。……ほな、嬢ちゃん、ちよつと待っててな」

イヴァリーさんは、白銀の豹を伴って、勝手口から出ていった。しばらくして、私がお茶を飲み終わる頃、彼は戻ってきた。

「ただいまー」

にこやかな彼の隣には、どこから連れてきたのか、白銀の髪の子の男の人がいた。

「おかえりな……え？」

その男の人の不機嫌そうな顔を見て、私は目をむいた。

「嬢ちゃん、目ーこぼれそうになってんで」

「だだだだ誰ですかアナタ……!!?」

イヴァリーさんの声も耳に入らない。

反射的に腰を浮かした私は、きよろきよろと逃げ道を探す。

髪の色は違うけど

その銀色の男の人は、私をこの世界に連れてきたお腹真つ黒な暴力王子に、とつてもソックリだったからだ。

十一話

「まーまー、落ち着いて」

腰を浮かしかけた私の肩を、イヴァリーさんがぼんぼんと叩いた。

「お嬢ちゃんからも事情を確認せなあかんみたいやし、悪いことはせえへん」

「な、頼むわ」と重ねて言われ、うぐ、と唸る。

目を泳がせていると、銀の髪 of 男の人は、もう一つ椅子を持ってきて私の斜め向かいに座った。

やっぱり、どー見ても似てる。あの王子様に。

その彼の薄い水色の瞳が、じーっと私を見た。

ひっじょうに落ち着かないし居心地悪い。

けどその人は、観察するように私を見るだけで、今すぐ自分に何かするような気配はなさそうだった。

「ほれ、座りんさい」

イヴァリーさんに促され、浮かせたおしりを渋々椅子にくつつける。

彼は「お茶のおかわり、淹れたるわー」と人懐こく笑った。

淹れてもらったお茶の香りを吸いこみ、気持ちを落ち着かせる。

琥珀の液体を口に含んだ時、彼はもう一人にも声をかけた。

「アルスもどうや？ 今日ハカエルの卵エキス入り花茶やでー」

ブハッ！

……思い切り嘔いた。今、なんつった？

「これ、カエルの卵が入ってるんですかーっ!?」

「うん。便秘にいいんよ」

「いやあーっ！便秘にきくにしても別のがいいですっ!」

「えー、じゃあトカゲの粉末とか？」

「ひいっ」

引き攣った声に、イヴァリーさんは不思議そうに答える。
アルスと呼ばれた男の人は、気の毒そうに私を見ながら、
「俺はいらぬ。イヴァリーが淹れる茶は、いつも変なものが入って
いるからな」と辞退した。

……てゆーかあんたら、それを先に言え！

よくよく見ると、この家の中は、変なツボや試験管、フラスコのよ
うなもので溢れてて、いかにも怪しげだ。

もしかして私、実験台か何かにされちゃうのかしら？
慄く指先でお茶のカップを奥に押しやった時、疑惑の家主さんは改
まった口調で私に向き直った。

「ところでお嬢ちゃん」

「……あの、瑠衣って呼んでください。お嬢ちゃんって年でもないんで」

「ふむ。わいから見たらお前さんも幼女みたいなもんやけど、まあええわ」

私のどこを見て幼女とか言ってるんだらう。

イヴァリーさんに対する警戒レベルが、また一つ上がる。

「それより、ルイがここに来るまでの経緯を、教えてくれへんか？」

「……はあ、いいですよ」

（早く家に帰りたいなー）と内心泣きべそをかきつつ、クーロンさんに拉致されたところから、手短かに話して聞かせる。

私の話が進むにつれ、斜め向かいの男の人が、徐々に顔を険しくさせていった。

「……で、銀色の豹にのっけてもらって、この森に来たんですけど……そういえばあの豹、外に連れてったんですか？」

命の恩人（恩獣か？）である豹は、さっきイヴァリーさんと外に出てっただけ。

首を傾げた私に、彼は「ここにおんで」と隣の男の人を指さした。

「……人に見えますけど？」

「グラスムンド王家の血を引く者は、獣に姿を変えることができるのだ」

「はあ……?」

指さされた男の人は、お前は馬鹿かと言いたげな口調で言い放った。いやむしろ、あなたが馬鹿ですか。

「あんな、こいつは、アルス。

アルスマグニフィス・シャルマール・モーフィス・グラスムンド。グラスムンド王太子やでー」

怪訝な顔をした私に、イヴァリーさんが補足する。

苦笑いのイヴァリーさんと、不機嫌そうなアルス何とかさんの顔を交互に見つめ、どうやら彼らが本気らしいと悟った。

……ああそうよね、私、ファンタジー世界にいるんだっただわ。

魔法があるくらいなんだもの、獣に変身できる人がいても、おかしくはない。

言われてみれば、あの獣の毛並みは、アルスさん（イヴァリーさん）にならってそう呼ぶことに決めた（の髪の色とそっくりだ。

透き通った水色の瞳も、よく似てる。

「ルイ、口が半開きやで」

イヴァリーさんに言われて慌てて口を閉じた私を、アルスさんが睨みつける。

「じろじろ見るな、無作法な。本来ならお前など、俺に口をきくことも許されないのだぞ」

うわ、こわっ。

びくっとして視線をそらす。

……あれ、ちょっと待って。

クーロンさんが王子さまで、この人も王太子さま、つまり王子さまだとしたら、

「……アルスさんとクーロンさんは、ご兄弟？」

「そういうこと」とイヴァリーさんが頷く。

そっか、だからそっくりなのか！

遅ればせながら合点がいったわ。

「じゃ、ひょっとしてあの黒い獣は、クーロンさん？」

森で襲われた恐ろしい黒い獣。

アルスさんと色違いのあの獣は、何となく、烏の濡れ羽みたいなの
ーロンさんの髪を連想させた。

「そっや、ようわかったなあ」

向かいのイヴァリーさんが、にっこり笑う。

えへ、と笑い返して、（いやそんな場合じゃないだろ）と思い直した。

その獣になったクーロンさんに、自分は殺されかけたのだ。

あの殺気はどー考えても、本物だ。

いや待て、クーロンさんだけじゃない。
アルスさんにも殺されかけたんだっけ。

今はアルスさんにそんな気はなさそうだけど、こんな世界にいたら、
命が幾つあっても足りないわ！

「あのう……私、元の世界に帰りたいですけど。帰る方法って、
ご存知ですか？」

正直、このヴィスールとかいう場所から一刻も早くサヨナラしたい。
私にとって切実な問いだ。

「うーむ……」

「……」

必死な視線に、けれど二人は、ばつが悪そうに顔をそらした。
もさつとした頭をぱりぱり搔いて、イヴァリーさんが重い口を開く。

「あんなあ、ルイ。帰還するためには、呼び寄せたのと同じ奴が術
をかけなあかんのや」

「……ということは」

「クーロンザキエルがその気にならないと、お前は元の世界に帰れ
ない」

アルスさんの低い声はつきりと告げる。

ゴン、と音がした。

私が机につつぷして、額をぶつけた音だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9888p/>

HAPPY TURN ?

2011年10月5日22時04分発行